

第5章 死亡

Chapter 5 General mortality

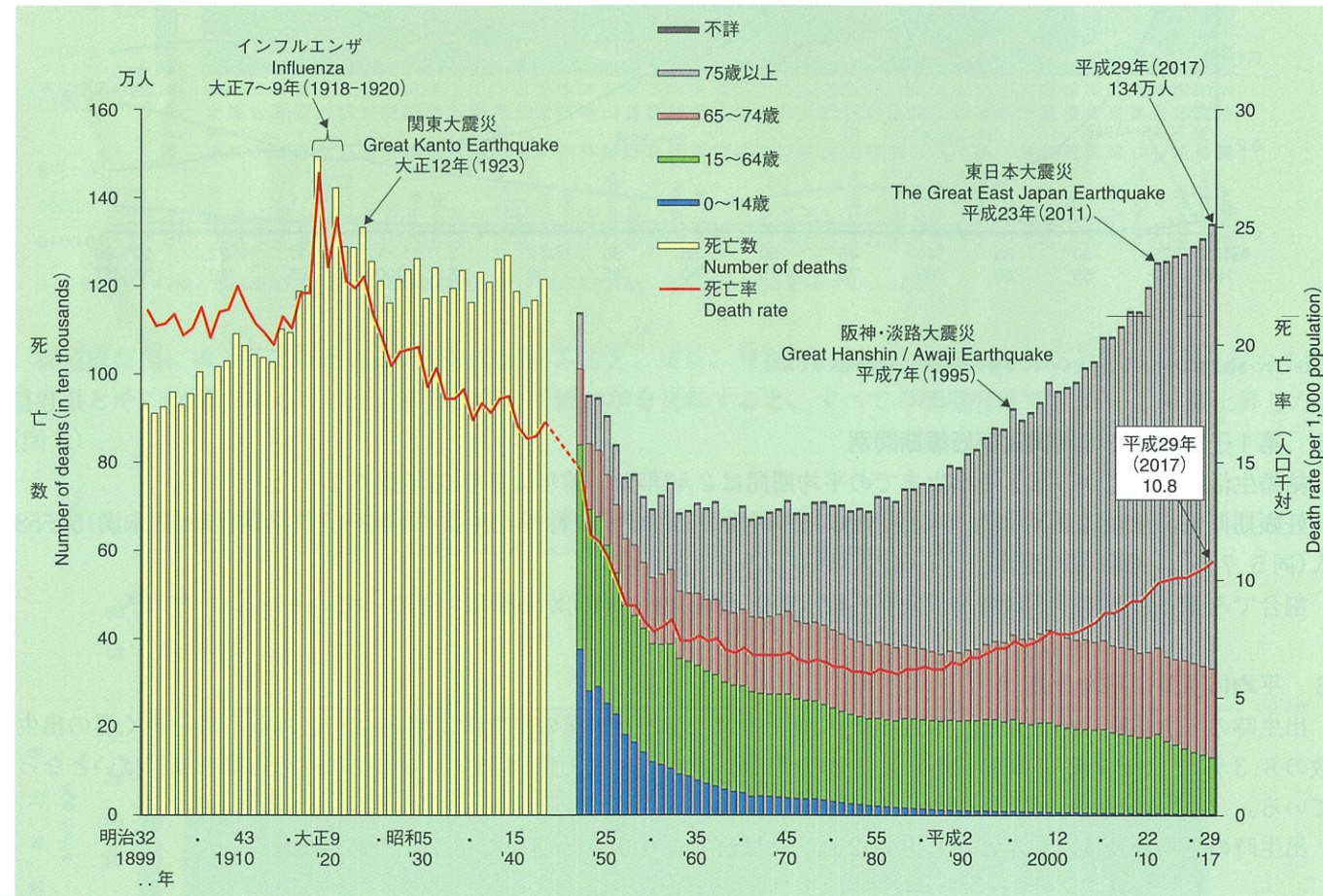
平成29年の死亡数は1,340,397人で、前年の1,307,748人より32,649人増加し、死亡率(人口千対)は10.8で前年の10.5より上昇した。また、男の死亡数は690,683人、死亡率は11.4で、女の死亡数は649,714人、死亡率は10.2であった。

1 年次推移

死亡数及び死亡率の年次推移をみると、第2次世界大戦前は、インフルエンザの流行や関東大震災を除くと、死亡数は90万~120万人台、死亡率は16~20台前半で推移してきた。昭和20年代後半からは、死亡の状況は急速に改善され、41年には67万人と最少の死亡数、54年には6.0と最低の死亡率を記録した。昭和50年代後半からは、人口の高齢化を反映して死亡数は増加傾向に転じ、平成15年に100万人を超え、死亡率も上昇傾向にある。

年齢階級別にみると、75歳以上の高齢者の死亡数が、昭和50年代後半から増加傾向となり、平成24年からは全死亡数の7割を超えている。(図9)

図9 死亡数及び死亡率の年次推移—明治32~平成29年—
Figure 9 Trends in number of deaths and death rates, 1899-2017



2 主な死因

主な死因別に死亡率の年次推移をみると、明治・大正・昭和初期は感染症の値が高く、昭和33年以降は悪性新生物、心疾患、脳血管疾患が死因順位の第1位から第3位を占めていたが、平成23年からは肺炎が脳血管疾患を上回り第3位に、脳血管疾患は第4位となっている。平成29年からは、死因統計に使用する分類の変更及び死因を選択する統計上のルールの変更により、肺炎は脳血管疾患、老衰より死因順位を下げ、第5位となった。

昭和22年以降の悪性新生物<腫瘍>、心疾患、脳血管疾患、肺炎の死亡率(人口10万対)の推移をみると、悪性新生物<腫瘍>は一貫して上昇を続け、56年に死因順位の第1位となり、その後も上昇傾向は続き、平成29年は299.5(死亡数373,334人、死因順位第1位)であった。心疾患は昭和60年に第2位となり、その後も上昇傾向は続き、平成6年から低下したが、9年には再び上昇傾向に転じ、29年は164.3(204,837人、第2位)であった。脳血管疾患は昭和45年をピークに低下、平成3年以降は横ばいで推移し、7年に上昇したものの、8年以降低下傾向にあり、29年は88.2(109,880人、第3位)であった。肺炎は、昭和50年から第4位が続いたが、この間おおむね上昇傾向が続き、平成23年に脳血管疾患を抜いて第3位となったが、29年は77.7(96,841人、第5位)であった。

自殺の死亡率は、平成29年は16.4で前年の16.8より低下し、第9位であった。(図10, 11)

図10 主要死因別死亡率の年次推移—明治32~平成29年—
Figure 10 Trends in death rates from leading causes of death, 1899-2017

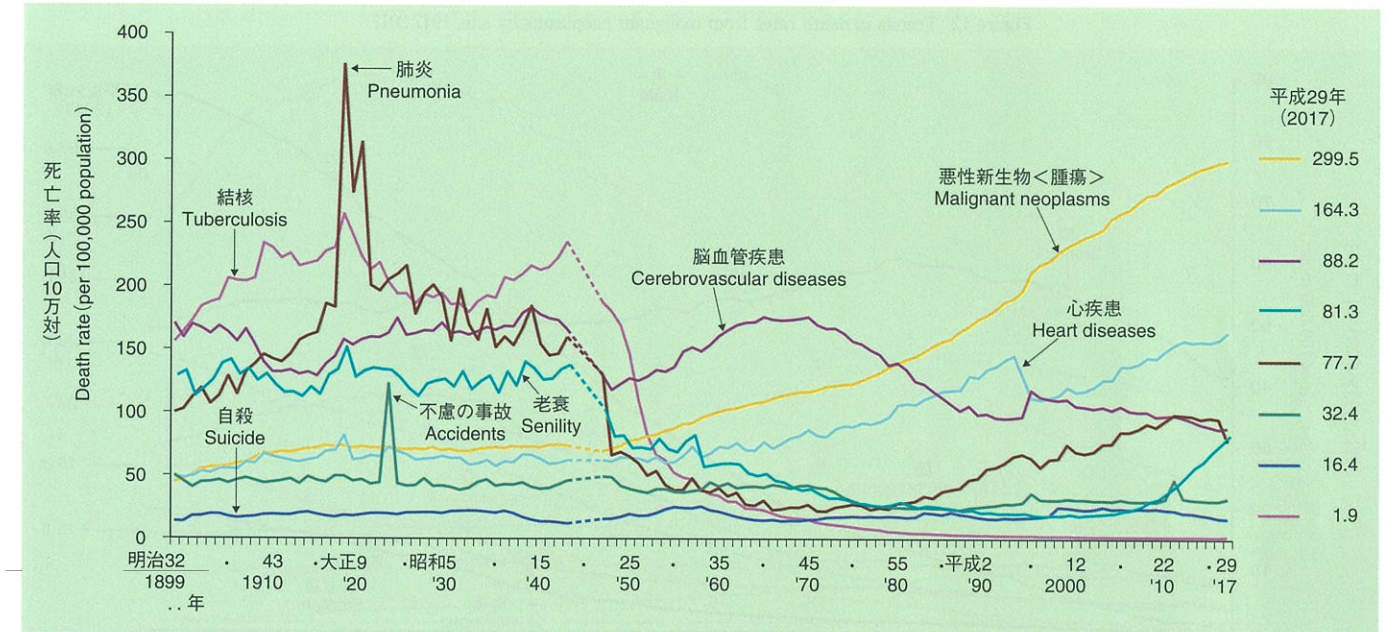
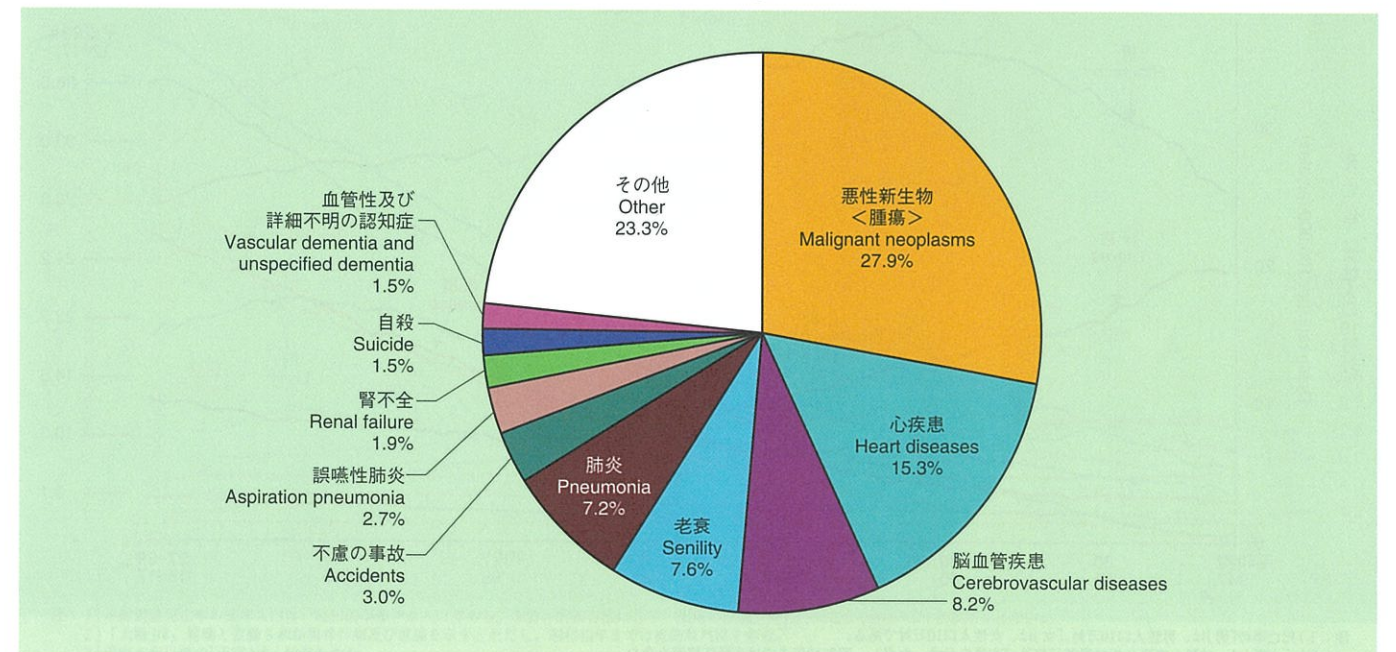


図11 主な死因別死亡数の割合—平成29年—
Figure 11 Death rates from leading causes of death, 2017



注：死因の「心疾患」は、「心疾患(高血圧性を除く)」を省略したものである。